HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学英語教員が認識する授業不安に関する実証的研究 ： 影響要因と対処過程を視野に入れた混合研究法による分析［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	片岡, 恋惟
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16318号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95245
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	KATAOKA_Rei_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

（様式４）

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：片岡　恋惟

学位論文題名

大学英語教員が認識する授業不安に関する実証的研究
－ 影響要因と対処過程を視野に入れた混合研究法による分析 －

本研究は，大学英語教員を対象に，授業不安の影響要因と対処方法を実証的に考察した応用言語学研究である。現在日本の大学では，大学教員になるために教職課程の履修や資格の取得など体系だった教育が義務づけられていない。そのため，十分な教育経験を積んでいない，あるいは教育に関する指導を十分に受けていないまま授業を担当しなければならない状況が生じている。とくに外国語科目の場合，教えることに関する不安だけではなく，外国語科目に特有の不安として「外国語不安」を経験する可能性がある。加えて，日本の大学における英語の授業（外国語科目）では，英語教育学・応用言語学を専門としない，あるいは海外への留学や滞在経験のない教員も授業を担当しており，大学において英語の授業を担当する教員（以降，大学英語教員）の中には，大学教員に特有の不安に加え，英語の授業に特有の不安を認識している教員が一定数存在すると推察される。しかし，大学教員を対象としたストレス研究は限定的であり，とりわけ大学英語教員の授業不安に焦点を当てた研究は進んでいない状況である。

以上の背景を踏まえ，本研究では，大学英語教員が直面するストレス状況について把握し，大学英語教員に固有の労働環境，職務形態，職務事情に応じた支援体制を構築する上で有益な示唆を得るために，以下の 3 点が研究課題として設定されている。

①大学英語教員が認識する授業不安の内容および構造と対処方法の把握（研究 1）

②授業不安に影響を与える要因の内容および構造，授業不安と影響要因の関係の把握（研究 2 と 3）

③授業不安への対処過程の把握（研究 4）

以上 3 点を考察するため，研究 1～4 を実施した。各研究の概要を以下にまとめる。

研究 1 では，まず大学英語教員が認識する授業不安の内容および構造について検討した。その結果，大学英語教員が認識する授業不安は，授業全般に当てはまる授業運営の仕方に関わる「授業方法に関する不安」，学生自身や授業活動を成り立たせる，あるいは教員を取り巻く教育環境に関わる「学生・教育環境に関する不安」，英語授業に特有であり，かつ教員自身の資質に深く関わる「英語教員としての資質に関する不安」の 3 つから構成されることが明らかとなった。このうち「授業方法に関する不安」と「学生・教育環境に関する不安」は，大学教員に共通する授業不安とみなされる。一方「英語教員としての資質に関する不安」は，英語の授業に特有の授業不安として，本研究において新たに見出されたものであった。次

に対処方法について，いずれの授業不安に対しても複数の異なる対処方法が使用されていることが明らかとなった。このことから，授業不安と対処方法は一対一の関係ではなく，同一の授業不安であっても異なる複数の対処方法が存在し，教員は自身の状況や環境に応じて対処方法を選択していると推察された。

研究 2 では，まず授業不安に影響を与える要因（影響要因）の内容および構造について検討した。その結果，影響要因は，職務に対する効力感や他者からの評価に対する満足感に関わる「職務効力感」，職務のさまざまな場面において経験する負担感やライフイベントにおけるストレスに関わる「職務負担感・ライフストレス」，授業活動や学生との関係構築に対する満足感に関わる「授業効力感」の 3 つから構成されることが明らかとなった。次に影響要因と授業不安の関係について検討したところ，上記の影響要因のうち「職務負担感・ライフストレス」は，3 つすべての授業不安との間に有意な高い相関があること，またすべての授業不安に対して有意な影響を与えていることが確認された。このことから，授業不安は単独で存在しているのではなく，その他の職務や教員の個人的生活状況と密接に関連していることが示唆された。

研究 3 では，影響要因として新たに教員の属性（専門分野，雇用形態，教員年数）および学生の英語レベルに着目し，それらの影響要因と授業不安の関係について検討した。その結果，上記の影響要因のうち専門分野と教員年数は，「学生・教育環境に関する不安」に対して有意な影響を及ぼしていることが明らかとなった。このことから，専門分野や教員年数といった教員の個人属性も授業不安と密接に関連しており，授業不安に対する改善支援策を検討する際には，授業不安そのものに加え，これらの影響要因を視野に入れることが有効であることが示唆された。

研究 4 では，授業不安への対処過程について検討した。教員年数の異なる大学英語教員 3 名（以降，教員 A：初任，教員 B：中堅前期，教員 C：熟練）を対象に半構造化面接を行い，複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model）を用いて，各教員の授業不安への対処過程について詳細に記述した。その結果，教員 A（初任）は，研究 1 において明らかとなった 3 つすべての授業不安に相当する授業不安を認識していた。とりわけ「学生・教育環境に関する不安」については，経験が浅い教員の方が強く認識する傾向にあるという研究 3 の結果を裏付けていた。次に教員 B（中堅前期）は，「学生・教育環境に関する不安」に相当する授業不安を最も強く認識していた。教員 A と同様，教員 B も教員年数が 6 年と比較的経験年数が浅い。加えて，教員 B は英語圏に長期間留学していた経験があるため，ネイティブレベルの英語力や英語圏に関する知識を有していたことから，「英語教員としての資質に関する不安」に相当する授業不安を認識しにくく，またそのことが学生や教育環境により意識を向けやすくしていたと推察された。最後に教員 C（熟練）は，「英語教員としての資質に関する不安」に相当する授業不安を最も強く認識していた。研究 4（質的調査）と研究 3（量的調査）の結果を踏まえると，「英語教員としての資質に関する不安」は，経験を積んでも解消されるとは言えない授業不安であると考えられた。したがって，熟練教員である教員 C においても，「英語教員としての資質に関する不安」に相当する授業不安が認識されたと推察された。その他にも，量的調査では観察されなかった他の授業不安に影響を与える要因の存在や，授業不安は時間的経過により変化すること，さらには適切な対処方法の選択・実行および授業不安の慢性化を防止する上で，影響要因が重要な効果を発揮していることが明らかとなった。

以上をまとめると，本研究により以下の 3 点が明らかとなった。

(1)大学英語教員は大学教員に共通する不安と英語教員に特有の不安の両方を認識している（研究課題①）

(2)授業不安はその他の職務やライフイベント，教員の個人属性により影響を受けている（研究課題②）

(3)授業不安は時間的経過により変化し，対処方法の選択や授業不安の慢性化を防ぐ上で，影響要因は重要な役割を果たしている（研究課題③）

これらの知見は，日本の大学英語教員が経験する複雑かつ特殊なストレス状況・環境を包括的に理解する上で新たな視座を与え，また教員が自身の教育活動を相対化し客観的に振り返る一助となると考えられる。